

# 第36回日本リーグの見どころ

## プレスリリース 第1弾

～実力伯仲で例年を上回る混戦模様～

男子8チーム、女子6チームが参加するレギュラーシーズンの男子上位4チーム、女子3チームによるプレーオフ(3月10・11日、東京・駒沢体育館)で優勝が争われる。男子2回戦、女子3回戦総当たりで行われるレギュラーシーズンは、男女のロンドン・オリンピックアジア予選(女子・10月12～21日＝中国、男子・10月23日～11月2日＝韓国)の開催で例年より開幕が後ろにずれ込み、さらにブラジルでの女子世界選手権(12月3～18日)、サウジアラビアでの男子アジア選手権(2012年1月26日～2月5日)もあって女子、男子の単独開催が多く、土日の連戦も相次ぐなど変則日程となっている。レギュラーシーズンを男子が8週、女子も11週で終えるコンパクトな編成で行われる今リーグ。前回は東日本大震災によりプレーオフが中止となり、レギュラーシーズン1位の男子・大崎電気、女子・北國銀行が栄冠をものにした。まずはプレーオフ進出をめぐる各チームの争いが注目されるが、男子は2連覇を狙う大崎電気をはじめ、湧永製薬、大同特殊鋼、トヨタ紡織九州の前回4強に、トヨタ車体を加えた5チームが激しくつばぜり合いするのは必至。大崎はエース宮崎、キャプテン永島ら日本代表選手を中心に豊富な持ち駒を誇っており、今シーズンから採用される試合エントリー数16人制を追い風としたいところ。前回まで12大会連続してプレーオフ進出を果たしながら、あと一步優勝に届かない湧永は玉村新監督のもとで14年ぶりの優勝を狙い、前回6連覇を阻まれて3位に甘んじた大同もV奪回に意欲満々。10月の国体優勝で勢いづく紡織、戦力整備が進む車体も12月の全日本総合初優勝した勢いで頂点奪取を目指している。第2グループと目される琉球コラソン、豊田合成、北陸電力の3チームは実力が拮抗しており、競り合いの中で上位陣との差を少しでも縮めたい。



永島、豊田、宮崎、猪妻、浦和ら実績豊富なベテランに加え、小澤、森、東長濱ら若い力もグングンと台頭と、個々の力強さに目を奪われがちだが、前回リーグを制する決め手となったのは、岩本監督の揺るがぬ信念のもと、「フォア・ザ・チーム」でチーム戦術を重視する姿勢、そして、とことん速攻、スピードを追求する戦い方だった。前回の成果に自信を深めつつ、それに満足せずに反省を繰り返して、継続をめざす今シーズン。ベンチ入り16人制の採用でさらにスピードに磨きがかかり、チーム初の2連覇へと突き進む。

1960(昭35)年の創部以来、日本リーグ2回、全日本総合10回、全日本実業団は不滅の10連覇を含む15回、国民体育大会でも17回の優勝を飾るなど、つねに日本ハンドボール界をリードしてきた大崎電気。創成期から10年余りは「全日本イコール大崎電気」と言われるほどの黄金期を築いてきました。その後、長い低迷期を経て86年に国民体育大会優勝、さらに88、89年の全日本総合2連覇で名門復活の狼煙(のろし)をあげ、90年代以降、再び日本一から遠ざかっていたものの、04~05シーズンで全日本実業団、国民体育大会、さらにはチーム初となる日本リーグ制覇を成し遂げて「3冠」を獲得し、「名門復活」を完全アピールしました。岩本真典監督のもとで2年目を迎えた昨シーズンは、「for the team」「thinking handball」を旗印に掲げて果敢な戦いに挑み、全日本実業団、全日本総合、そして、日本リーグの3大タイトルを獲得、チーム創設50周年の節目を飾るにふさわしい進撃ぶりでした。今シーズンは、チーム丸となって勝利をつかみとった選手20人が健在、さらに小室大地、時村浩幹のルーキーコンビが加わり、チームにフレッシュな風を吹き込んでいます。チームのセカンドネームは「OSAKI OSOL」。イタリア語で地球の核を意味する「OSOL」(オーソル)にはマダマのごとく熱く燃え、ハンドボールをよりメジャーなものに引き上げたいという強い願いが込められています。また「O.S.O.L」は、英語で「空を飛び、海を越え、大地を駆けぬける」という頭文字を合わせたものです。サポーター、ファンの皆さまと一緒に各日本

タイトルの獲得に全力を注ぐとともに、東日本大震災で被災された方々に勇気と力を与えるような熱いプレーをお見せします。OSAKI OSOLに温かい応援をよろしくお願いいたします。



着実にチーム強化を図り、前々回は6位へ浮上。しかし、さらなる前進が期待された前回は7位と一歩後退しただけに、再浮上が至上命題となる今シーズン。7月の全日本社会人選手権では、今村、中島と左右の得点源をケガで欠く布陣ながら、湧永製薬に3点差(29-32)に迫るなど、上位陣にも対抗できる力を示した。ポスト中村、GK 藤堂、両サイドの大橋、桶谷、センター野田を中心にしっかり態勢を整え、好スタートが切れば、プレーオフ進出圏内突入も見えてくる。昨年の全日本総合選手権大会前はケガをした選手が多く日本体育大学に敗戦を喫すなど苦戦の連続でしたが、このブレイク期間中に回復に向っており、花巻での試合は活躍が期待できます。左腕エース今村(No. 13)をはじめ、今シーズン絶好調のコントロールタワー野田(No. 4)を中心に昨年以上の好ゲームを展開します。

今リーグでの挑戦：7mT阻止率3割を目標とする藤田(盛岡南高→中央大)も腰の状態で万全とは言えないが、堅実なキーピンでチームに貢献しています。出身地での出番を楽しみにしてください。

ご期待に応えるようガンバります。



©日本ハンドボールリーグ